

ひきこもり当事者からみた、つながりの再構築

－ ひきこもりの経験と支援機関との接点の振り返りを通して －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
藤田 京子

ひきこもりは「様々な要因の結果として、社会的参加（義務教育を含む就学，非常勤職を含む就労，家庭外での交遊など）を回避し，原則的には6か月以上にわたって家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念」と定義され，その定義に当てはまる者は，全国推計で69.6万人に上ると発表されている。その中で作成された「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」では，支援方策として家族支援・当事者支援が示されているが，ひきこもり当事者をどのようにしてその支援につなげていくかについては示されていない。

そこで，本研究では，現在何らかの地域の社会資源につながる事ができているひきこもり当事者を調査対象者とし，ひきこもりになってから現在に至るまでの，ひきこもり当事者の抱えていた葛藤や気持ちの変遷，支援機関となぜつながることができたか等を明らかにし，その結果に基づいて，支援につなげるまでの支援者の役割を考察することを目的とした。

13名のひきこもり当事者に半構造化面接を実施し，得られた語りについて，修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。その結果，27の概念が抽出され，それらは12のカテゴリーと3つのコア・カテゴリーにまとめられた。

ひきこもりの状態になってから支援機関を利用している今までのプロセスは，不安定と選択と安定の繰り返しであるとわかった。また，状態を次の展開へ進めるためには，ひきこもり当事者の現在置かれている状態の中で，安定が形成されていることと，期待と不安の揺れと対峙した際に，それを自身のものであるとして享受する力がひきこもり当事者に育っていることが，求められるとわかった。「安定」と「揺れ」がプロセスの重要な要素であり，安定が揺れを享受するための力を育むのである。

また，そのプロセスを基に考察した支援者の役割は，「ひきこもり当事者が辿るストーリーを知り，ひきこもり当事者が今どのストーリーに位置しているかを把握すること」，「支援者が示すアプローチではなく，ひきこもり当事者がそう思えるようなきっかけづくりを行うこと」，「ひきこもり当事者が動き出した時に，失敗しないように設定するのではなく，支えとなること」と考えた。支援者には，ひきこもり当事者の状態を的確，且つ綿密にアセスメントする力が求められる。

今後は，家族支援と当事者支援を統合し，ひきこもりに対する支援全体の流れをイメージできる研究と，ひきこもり当事者の語りと客観的事実を照らし合わせた俯瞰的な研究を行い，支援者の役割について，より一層の考察を深める必要がある。